平成１９（２００７）年１０月１５日発刊

南極ＯＢ会　会報

Ｎｏ．１（創刊号）

発行　南極 OB 会
会長　川口貞男
編集　広報委員会

会報発刊について

川口貞男新ＯＢ会会長は、就任するとさっそく広報委員会を新たに置くことを決めた。そして運営委員会などで検討した結果，ＯＢ会は新たに「南極ＯＢ会会報」を発行することになり、新会報は広報委員会が編集することになった。

会報の目的は、ＯＢ会の活動や南極事業の展開などを広く知ってもらい、理解と協力を得たいということであり、ＯＢ会員はもちろん世間一般にも理解とご支援を得たいと願っている。

限られた人数のボランティアであるから、広報委員会の当面の活動は、「会報」を定期的に出すことと、すでにスタートしているホームページをさらに充実することである。とりあえず見本となる創刊号を作ってみたので、ご意見を寄せて頂きたい。

ＯＢ会は年会費制ではなく、会報発行の予算がないので、運営委員会ではこの会報を「通信費」として有料化することになった。通信費は３０００円とし、振込用紙を同封したので、ぜひご協力をお願いしたい。若い方はホームページなどで用が足り、今更紙媒体の会報など要らないという方が多いと思われるが、年配者の支援と考えて、ぜひ購読して頂きたい。お願いします。

（広報委員長　　深瀬　和巳）

☆　☆　☆

ＯＢ会会長に川口貞男氏
臨時総会で新体制決まる

南極ＯＢ会は、６月２３日（土）、午後１時から、「村山雅美さんを偲ぶ会」に先立ち、東京・霞が関ビル３３階「阿蘇の間」で臨時総会を開催、昨年１１月に亡くなった初代南極ＯＢ会会長村山雅美氏の後任に国立極地研究所名誉教授川口貞男氏を、挙手多数で選出した。

第２代の会長に就任した川口氏は、次のように挨拶した。

「村山さんの後を長く空けておくわけにいかない。いろいろ大変だがしっかりやります。新会長として運営委員会が重要で、運営委員長を渡辺興亜さんに願いたい（拍手）。また、南極５０周年をやってみて広報が大事だと分かったので広報委員会を作り、委員長は深瀬和巳さんに願いたい（拍手）。５０周年記念事業は一応終わったが、まだ地方の講演会などが残っているので、委員会を継続し、その委員長には国分征さんにお願いしたい（拍手）。

今日は臨時総会である。定例の総会は今年秋に開催したい。

南極観測５０周年記念事業は、皆さん方の

ご協力を頂いて成功裡にほぼ終了した。有難うございました。結果としてなにがしかのお金が残りましたので、観測隊のアーカイブを作りたいと考えています。これから各方面と協議・検討していきたいのでよろしくお願いしたい」。

渡辺新運営委員長は、運営委員のメンバーを発表し「ＯＢ会はできたばかりで不備な点があるが、これから１年でよりよい組織にしたい」と抱負を述べた。また５０周年委員会の実行委員長を勤めた国分氏は、記念事業報告をしたが、詳細は後ろのページに掲載した「記念事業報告」を読んでいただきたい。

なお、委員会メンバーは次の通り

☆ **運営委員会　委員長　渡辺興亜**

委員　小野延雄、久松武宏、白壁弘保、佐野雅史、芦田成生、神田啓史、西尾文彦、阿保敏広、増田光男、松原広司、神山孝吉、増田　博

☆ **広報委員会　委員長　深瀬和巳**

委員　柴田鉄治、阿保敏広、稲葉智彦、福谷　博

☆ **５０周年事業継続委員会**

委員長　国分征

委員　平山善吉、渡辺興亜、柴田鉄治、芦田成生、深瀬和巳、福谷　博、小野延雄

☆　☆　☆

川口貞男新ＯＢ会会長挨拶

（川口新ＯＢ会会長は、ＯＢ会広報委員会の求めに応じ、新たに次のような挨拶を発表した）

村山会長が亡くなって半歳以上が経ち、村山さんを偲ぶ会も多くの参列者のもと無事終了したところで、いつまでも会長不在というわけにもいかず、会長を決めなくてはならなくなりました。

「宗谷」、「ふじ」、それに「しらせ」の初期と三代の船に乗り、極地研究所にいたこともあり、顔見知りのＯＢが多いだろうということで、私が引き受けることになりました。

南極観測５０周年記念事業には、多くのＯＢの方の寄付金、行事への参列があり、南極に寄せる強い思い、まとまり、パワーを感じました。この勢いを維持したいものです。

このため計画したものは、OB 相互の情報交換を密にすることで、次のようなことを実行していきたいと思います。

① 会報の発行、ホームページの続行。
② 多くの人に南極を知ってもらうということで、国分征さん、柴田鉄治さんたちによって始められた「南極教室」の続行。
③ ５０周年記念事業の残務整理。
④ これまでずっと続けてきた出発隊の壮行会とミッドウインター祭の継続。

（写真は、会長に選出された直後の川口新会長）

これらの事を進めていくにも、基本になるのは名簿の整理が大切です。５０周年記念事業でかなり整備しましたが、今後とも続けていく必要があります。引き続きご協力のほどよろしくお願いいたします。

☆　☆　☆

南極観測５０周年記念事業

盛大に、滞りなく、閉幕

ＯＢの皆さんの協力に感謝！

南極ＯＢ会などが中心になって計画、実行してきた南極観測５０周年記念事業は、計画通り滞りなく、盛大に、終了することができた。ＯＢ会会員の絶大なご支援、ご協力によるもので、実行委員会として心から感謝申し上げます。

５０年前の１９５６年秋、第１次隊を乗せた「宗谷」が東京港を出港した日、昨年１１月８日に、東京・台場の「船の科学館」に繋留されている「宗谷」での出港式再現祝賀会、同所での記念講演会、同日夕方赤坂プリンスホテルでの記念祝賀会などをメイン行事とし、都内での記念講演会や南極教室など、また全国各地の支部主宰の講演会やイベントなどを、半年以上にわたって展開してきた。

５月２５日、国立極地研究所の講堂で開かれた第４回記念事業委員会総会で、この記念事業の総括が行われた。企画委員会、募金委員会、各実行委員会、地方支部の報告などが行われ、どの報告も、予定、計画通り事業が進んだとの内容であった。

課題だった募金は、事業予算２.５００万円の内、個人募金は1.０００万円、企業関連募金は１.５００万円としたが、いずれも達成することができたと報告された。ＯＢなど個人は８００名近くの応募があり、この人数で目標額を達成することができた。募金委員会の総括としては「目標額を上回ったことは、観測隊ＯＢ、関係者ならびに関連企業のご協力のおかげと考える。募金委員以外の多くの方々の支援を得た。ＯＢ会を主体とする募金活動は今回初めての経験であり、経験不足から反省すべき点は多いが、多くの関係者の方々、企業を含む募金応募者の皆さんのご理解で、特に大きな失策もなく、無事に事業を終えることができた」としている。

以下記念事業委員会の報告を掲載する。

南極観測 50 周年記念事業報告

２００３年６月、渡辺興亜氏（当時極地研究所所長）の呼び掛けにより、南極観測５０周年記念事業を考える懇談会がもたれ、２００４年７月には記念事業準備委員会（村山雅美委員長）が発足し、南極観測隊参加者を中心とした「南極ＯＢ会」による検討が始められた。２００５年５月２７日には、南極観測５０周年記念事業委員会の発会総会が開催され、具体的準備の体制を整えた。

記念事業は、５０年の歴史を踏まえ将来を展望するとともに、これまでの観測によって得られた科学的成果、設営的技術成果を広く国民に伝えることを目的とし、記念事業の骨子として祝賀会、全国規模の講演会、人間的側面から見た観測活動記録の出版などが企画された。「宗谷」が出港した１９５６年１１月８日から５０年に当たる２００６年１１月８日を記念日として祝賀行事を行うとともに、その日の前後３ケ月程度を５０周年月間として、一連の記念行事を計画した。

事業予算は2.５００万円として、個人募金１.０００万円、企業関連募金１.５００万円として合計募金目標２.５００万円とした。多くの関係者からの協力を得て、観測隊ＯＢおよび関係者からの個人寄付と、企業、新聞社などからの寄付により、目標を超える基金を頂くことができた。地方支部の講演会は、まだ終了していないものもあるが、当初の事業計画は、ほぼ予定通り終了した。

１、南極観測５０周年記念祝賀会

２００６年１１月８日:船の科学館「宗

谷」船上における「宗谷出港記念」式典および同日夕の赤坂プリンスホテルでの記念祝賀会

２、記念講演会・展示会

「“宗谷”での観測時代」、「南極観測50年」、「南極の動物たち」

南極ＯＢ会支部主催地方講演会および記念展示会

３、出版

「**南極観測隊**―南極に情熱を燃やした若者の記録―」技報堂出版（株）

「**ニッポン南極観測隊**　人間ドラマ50年」丸善（株）

写真集「**南極**」技報堂出版（株）

４、５０周年配布記念品

記念パンフレット、写真でみる南極観測５０年（モノクロ写真集）、記念カレンダー、南極地図など。

なお、地方支部の講演会はすべては終了していないことや、事業報告の作成などを考慮し、５０周年記念事業継続委員会により、今後の残務整理を行うことにしている。

南極観測５０周年記念事業委員会

（国分征　記）

☆　☆　☆

遺影、遺品飾り盛大に
村山さんを偲ぶ会開く

昨年１１月５日、８８歳で亡くなった村山雅美南極ＯＢ会初代会長の「村山さんを偲ぶ会」が、６月２３日（土）午後１時半から、東京・霞ヶ関ビル３３階の「阿蘇の間」で開催された。キヨ夫人らご遺族５人、南極ＯＢ会など南極関係、旧制松本高校と東京大学の山岳部関係、日本山岳会、白瀬記念館、北極クラブなど、村山さんにゆかりの深かった方々２２０余名が参加した。

会場中央には村山さんの遺影が飾られた。また遺影に向かって左側の壁には、村山さんの幼少のころからの写真が展示され、愛用していた英文タイプライター、テニスのラケット、極点旅行の際搭乗し指揮をとった雪上車６０４号のプラモデルなどが並べられた。

会は**小野延雄**極地研究所名誉教授の司会で始まった。小野さんは次のように述べた。

「南極ＯＢ会は、南極観測５０周年をＯＢが中心になってお祝いしよう、と呼びかけられた村山さんが中核になって、３年前に発足した。第１次隊を乗せて「宗谷」が東京港を出港した１１月８日を記念日にすることになり、それから５０年たった昨年１１月８日に式典と祝賀会を開催した。その日を楽しみにしていた村山さんは、その３日前に逝去された。今日この会が始まる前に、この会場でＯＢ会臨時総会を開き、後継会長に川口貞男さんを選出した。発起人を代表して川口新会長に開会の挨拶を願いたい」。

（村山さんを偲ぶ会正面に飾られた遺影）

川口貞男新ＯＢ会長の挨拶は次の通り。

村山さんが亡くなられて、もう半年以上になる。葬儀の時、ＯＢの方たちからぜひ偲ぶ会をということだった。村山さんは、山の関係、極地探検など交遊の幅の広い方だったので、どういう方々に案内を出すか、検討を重ねた。その結果、旧制松本高校の山関係者、東大スキー山岳部のＯＢ東大山の会、戦後の日本山岳会のマナスル関係の方、南極関係はＯＢ会、極地研究所、文科省、極地振興会、白瀬記念館、また北極クラブ、船の科学館等に案内をお出しした。

偲ぶ会の名称は、「村山先生」ではなく親しみやすい「村山さん」にした。

また、村山さんはミッドウインターを楽しみにされて、日本の夏至のころいろんなことを企画された。極地研の河口湖研修所に集まって騒ぎ、翌日は村山さんの南極講座があったりした。だから開催日は、ミッドウインターにやることになったが、参加者には高齢者が多いので１日遅れて土曜日の昼に開催することにした。

今日はご家族、奥様、二人のお嬢さんとそのご主人の５人が参加されている（拍手）。しんみりしたことが好きではなかった村山さんだったので、楽しい偲ぶ会にしたい。よろしくお願いする。

会長挨拶に続いて参加者のスピーチが始まった。

東大山の会　　松丸　秀夫さん

（村山さんの１年先輩、６０年にわたり山仲間の親交があった方）

村山さんは、南極で大きな足跡を残された。亡くなられて残念でならない。戦争から帰られた村山さんは、日本山岳会が再び活動を始めようと努力している頃活躍された。当時、アルピニズムは頂点に達し、人類はついに世界最高峰エベレスト登頂に成功し、日本も８０００ｍ級の未踏峰に登らねばならないと燃えた。マナスル登山隊が結成され、村山さんはその重要メンバーに選ばれ活躍された。そのあたりのことは他の人に譲って、更にその前の時代のことを申し上げる。

村山さんは、東京高等師範付属中学、旧制松本高校、東京大学と進まれたが、いずれも山岳部に入っていた。松高時代は、松高山岳部の黄金時代で、村山さんはその性格から多くの人に好かれていたようだ。

山に行くには、食糧や燃料などが要る。出入りしていた店、米田屋の肝っ玉女主人が、勘定はあとでいいよ、卒業払い、出世払いにしてくれたという。村山さんたちは、懐勘定を気にせずに登山を続けることができたそうだ。

温泉旅館が、高校のある松本の近くにあって、いつでも出かけて行って、使わせてもらっていた。東京新聞が「この道」と題して名士の自叙伝を１ヶ月にわたって連載しており、村山さんもいまから２年前に書いた。それが「地の果てに挑む」という題の本になったが、その中に松高生らと芸者たちの写真が掲載されており、「豪遊する松高生」と説明がついていた。

これを見てけしからんと怒る人がいた。私は弁明した。これは村山さんたちがやったのではなく、松本の人たちに好かれていて、井筒屋という宿の主人が芸者をセットしたのだ。宿の主人は、芸者は一番の教育手段、最高の教育手段なんだと思っていたらしい、と弁解したんです。

東大に進んだが、戦争で繰り上げ卒業となり、海軍に入り、予備士官の道を進んだ。このようにたくさんの人に慕われて、盛大な偲ぶ会が開かれたのは喜ばしい限りです。

日本山岳会　　松田　雄一さん

（マナスル登山隊の最年少隊員。第２次隊員で、村山さんとは第２次で一緒だった方）

マナスル登山で一番思い出されるのは、第２次隊のネパール・サマでの事件だ。現地の人たちが、日本隊を通さない、登山させないと妨害した。渉外担当だった村山さんは、何とか難関を打開しようと努力され、更に翌年の３次隊の先遣隊として現地に行き、ついに解決された。そのお陰で第３次隊が未踏峰のマナスル登頂に成功したのだ。

マナスルは１９５２（昭和２７）年の調査隊、５３年の第１次隊、５４年の第２次隊、５５年の第３次の先遣隊、５６年の第３次隊と５回にわたり派遣されている。

私は第２次から参加した。村山さんは先発隊として先に出かけられており、本隊の私たちは船で行き、カトマンズ経由先発隊の後を追っていた。その途中で、先発隊から現地のすごい反対で登山できなくなったとの連絡が入り、大変びっくりした。村山さんはなお諦めず、直ちにスッパと呼ばれる郡長、ラマ教の実力者に会いに行き交渉したが、それでも打開できず、この年は登山できなかった。

第３次はこの事態を打開できるかどうか、５５年９月、小原勝郎、橋本誠二氏と村山さんの３人が先遣隊として入り、サーダーも人格、力量豊かな人に替え、ニャックというところでサーダーと会い、ついに和解に達したのだった。この成功の第一人者は村山さんだったと私は思っている。

村山さんは第３次の本隊に参加するはずだったが、先遣隊の帰国直後に南極への誘いがあったと聞いている。村山さんは人の関係を大切にする方で、マナスルでできた人間関係を大事にされ、今日まで交流が続いてきた。この偲ぶ会にも何人かがみえておられる。

南極観測隊　　村越　望さん

（村山さんの東大の山仲間、南極の盟友である日本極地研究振興会の鳥居鉄也氏がスピーチされる予定だったが、体調を崩され、第１次越冬隊員など南極のベテラン村越氏が急遽登壇した）

村山さんの周りにはいつも冗談が飛び交い、傍にいるだけで楽しい方だった。亡くなられて、いまも寂しい思いをしている。

村山さんのニックネームは、いつもピンピン元気だから、「ピン助」だった。第３次の越冬隊長を勤め帰国が近づいたころ、ほんとかどうか分からないが、村山さんは奥さんに「ポンコツ」というニックネームを付けられていたそうで、その奥さん宛に「ポンコツ修理しておけ」と電報を打ったのだそうだ。程なく奥さんから「修理済んだ。試運転してよろしきや」との返電があったのだそうだ。

仏文学者で、文化勲章受章者の河盛好蔵さんが、これはたいへんしゃれた話で、フランスの小噺だろうと思っていたら、日本の南極観測隊の実話だと知って、驚いて、感心したと、何かのコラムに書いていた。

ピンピンしていた人が先に逝き、ポンコツと言われた方がますますお元気だ。どうか楽しんで長生きしてください。

ここで前半のスピーチは終わり、村越さんの発声で「献杯」、懇談に入った。ビデオで村山さんのお元気な講演の模様や、極点旅行時の颯爽とした姿などが映し出された。後半の進行役は、日本山岳会、東大山の会の**藤本慶光**さんが担当した。

後半は、５人の方がのスピーチをされた。短く紹介する。

元南極統合推進本部委員　　三角哲生さん

（文部事務次官であった方）

９次の南極点旅行の時は、報道機関の朝日新聞、共同通信、ＮＨＫなどが同行取材させよと、大変だった。村山さんは技術力のない人はねえ、と断られた。決断、それも上手に決める方だった。

旧制松本高校山岳部ＯＢ会「わらじ会」　牧野康夫さん

私は村山さんとは、小、中、高と一緒だった。松高では、彼は学校にいるより上高地にいる方が長かった。彼は下駄履きで登っていて、私は彼の後をくっついて登った。

北極点制覇の女優　　和泉雅子さん

北極点を目指して２度目の挑戦をしている時、村山さんが陣中見舞いに来てくれた。「隊長って、辛いだろう。隊長は辛抱、辛抱。都合の悪いことは聞こえぬフリをすればいい」と教えてくれた。
これだっと、分かり、１９８９年５月１１日、北極点に到達した。

砕氷艦「ふじ」第２代艦長　　松浦光利さん

１０年ほど前「しらせ」の出港見送りで、村山さんと一緒になったことがある。海上自衛隊音楽隊がアメリカのマーチ「錨を揚げて」を演奏していた。村山さんは「艦長、どうして〝軍艦マーチ〟を演奏しないのだ」とお冠だった。私自身同感であり、その後防衛庁の海幕南極支援室を通じて担当部長に申し入れをした。
翌年「しらせ」出港の日、村山さんと壮行演奏が始まるのを見守った。そして「軍艦マーチ」が最初の曲として、高らかに演奏された。南極観測始まって以来の出来事だそうで、埠頭で大拍手が起きた。村山さんは、いきなり「万歳」と叫び、喜ばれた。

南極ＯＢ会秋田支部長　井上正鉄さん（２７次越冬）

ニッポン最初の南極探検隊白瀬中尉の故郷秋田には「白瀬記念館」があり、村山さんは秋田をしばしば訪れてくれた。感謝している。

最後に発起人代表、日本山岳会会長の**平山善吉**さんが閉会の言葉を述べ、午後４時前に会を終えた。
参加された方々には、帰るときに村山雅美著「地の果てに挑む」（東京新聞出版局）が贈呈された。

鳥居鉄也先生の祝賀会開催
数えで卒寿、そして自伝出版

第４次、８次の越冬隊長で、財団法人日本極地研究振興会理事長の鳥居鉄也さんは、今年数えで九十歳を迎えられ、また自伝「南極とともに―地球化学者として」を岩波書店から出版された。これを機会に「鳥居鉄也先生の卒寿と自伝上梓を祝う会」が、９月２９日（土）午後、東京・丸の内の日本工業倶楽部で開催された。財団関係、東大山の会、学会、ドライバレー関係、国立極地研究所、南極観測隊など約２００人が出席、鳥居さんと矩子夫人を迎え、盛大なお祝いをした。

発起人の一人平山善吉さんが開会の挨拶、同吉田栄夫さんが司会で、祝辞は、東大スキー山岳部の後輩の谷垣禎一自民党政調会長（元財務大臣）、東大で１年後輩の藤原鎮男東大名誉教授、旧制八高や東大の山仲間で南極２,３,６次隊の原田美道さん、写真集「南極大陸」を出版した写真家白川義員さんらが述べた。

この後鳥居さんが挨拶のため夫人とともに登壇された。鳥居さんはメモも持たず、よどみもなく、簡潔に次のように挨拶された。「耳が遠くなった。きょう北は北海道から南は沖縄まで、たくさんの方が参加されて、心から感謝する。きょう本を差し上げるので面白いところを読んでいただきたい。大学２年の時、医学部病理学教室緒方知三郎教授が指揮する満州のカシン・ベック氏病調査隊に加わり、これを契機として地球化学の道を歩むことになり、戦後は南極の地球化学的研究に魅力を感じて観測隊に参加することになった。初期の頃は地球物理研究者以外は足軽ということで、設営担当からスタートした。またドライバレー地域の観測を２４年間続けた」。

この後、藤井理行極地研所長の発声で乾杯、懇談に入った。懇談の間に、ドライバレー・グループの由佐悠紀さん、赤門運動会・IOC委員の岡野俊一郎さんらがお祝いを述べた。

最後に鳥居夫妻に、福山美知子さん（東大山の会）、長谷川慶子さん（元極地研、現南極ＯＢ会事務局）らが花束を贈呈、祝賀会を終えた。参加者には新著「南極とともに―地球化学者として」が贈られた。

（注）カシン・ベック氏病：中国東北部やシベリアの地方病。思春期前後に発病、指趾の関節に疼痛・腫脹・変形・脱臼が起きる。高度の時は発育が止り、また自然骨折が起る。（広辞苑による）

連載「時は巡り」①

「西堀さんと第１次越冬隊」

第１次越冬隊（気象担当）　村越　望

わが隊は、第１次越冬隊。しかし固有名詞を使って「西堀隊」と言ってもおかしくないほど、西堀栄三郎さんの存在は大きかった。

越冬隊員１１名のうち、誰が見ても最適任者と見られ、必然性のあるのは、越冬隊長である西堀さん一人であったと思う。他の１０人は、南極に行きたいという願望は非常に強かったけれど、余人をもって替え難いというほどの必然性はなかった。

敗戦後１０年程経ったあの頃、極地についての深い知識を持っていた人は、日本には数人しかいなかった。加納一郎さん（注）が訳されたＡ・チェリー・ガラードの「世界最悪の旅」などは、多くの若い人の胸に、極地へ

の情熱を傾けさせた。また西堀さんは、日本のヒマラヤ登山の先鞭をつけ、極地の知識も豊富で、滞米中には米国の極地探検家を訪ね、貴重な意見を聞き出している。

南極の越冬隊長としてこの人の他には見当たらなかった。

小社会

たったの１１人で、一切の生活の雑用をこなさなければならない。一人ひとりが掛替えのない責任者となり、さらに他の部門への手助けが加わってくる。帰国してからしばしば、越冬隊員間の仲は良かったのか、喧嘩はなかったのかと、聞かれることが多かった。

普通の人間の集まりであるから、面白くないこと、気に喰わないこともある。が結局は、いつまでも互いに口を利かないわけにはいかないほどの小社会で、外に逃げ場はない。互いに、話をしたり、頼み頼まれざるを得ない状況になって、冷戦状態は長くは続かない。西堀さんによると、外国隊のうちには、酒を制限している隊もあるようだし、閉ざされている小社会では、時に刃傷沙汰もあったと聞く。激することの少ない温和な国民性に感謝している。

（第１次越冬中の若き日の村越望さん）
（注）写真は北村泰一著「南極第１次越冬隊とカラフト犬」から借用した。

偉い人論争

越冬も半ばを過ぎた頃、食事が終わった後の雑談で、偉い人論争があった。

西堀さんの主張は、結果がすべてを決めるというものであった。エベレストに初登頂したヒラリーは偉く、それ以前に挑戦したが失敗したマロリーらは偉くない、どこかに欠陥があったため失敗したというのであった。南極点を目指し帰路全滅したスコット隊長より、成功したアムンゼン隊長の方が偉いということだった。

山男の医者中野征紀さんや東大の地質の先生の立見辰雄さんは、そう一概に決め付けるのは問題ではないかと、話は込み入ってきた。食卓の向こう端での話で、こちらまでははっきりとは伝わらなかったが、こじれた雰囲気は伝わってきた。

越冬も半ばを過ぎて、越冬成功の切符もほぼ手にした人の言う言葉ではなさそうだ、と思った。すべてのことは苦労して築いた先人の礎石の上に築かれたものであろう。アムンゼン、スコット、白瀬などの先人の教えを我等も受けているのだから。

リーダーシップ

今となっては確かめようがない。西堀さんが越冬のノウハウについて、米国の隊長に聞いた話。「もし隊がうまくいかなくなった時には、そのすべてを隊長の責任になるように仕向けるのが隊長のやるべきこと」と聞かされた。つまり隊長一人が悪者になり、全隊員の注目を集めることで、隊員間のいざこざは消えて、悪い隊長という新たな目標に向かい、まとまるのだという。

越冬末期、隊全体が精気の乏しい無気力の状態に陥った頃、突如として湧き上がったのが公式記録問題。公式記録が個人の考課表ではたまらない。すったもんだ、食卓の端では侃侃諤諤、結局公式記録の題名は、西堀個人日記と代えられた。もしかしたらこれは西堀さんの自作・自演ではなかったかと、今頃になって思うことである。少なくとも、ある種の緊張感をもたらしたのは確かであった。

終わりの頃

こうして年が明け第２次の「宗谷」が近づいてきた。陽は高く、穏やかな季節で、１年間を過ごした満足感で、基地は明るかった。次隊の受け入れ態勢、自隊の引き揚げ態勢の作業は楽しかった。

越冬中はずっと、４０歳以上の隊員による「１＋（プラス）トロイカ体制」の下で、私はほとんど風当たりもなく、兵士として黙っ

て自分の仕事をこなせばよいということは有難かった。
　リュツォホルム湾内の氷状は悪く、「宗谷」は約４０日も氷につかまった後脱出、米砕氷艦バートンアイランド号の助けを借りて、昭和基地の西北西約１２０㎞に達した。そこから２月９日と１０日に小型飛行機ビーバーを７便飛ばし、１１人の第１次越冬隊員は「宗谷」に収容され、越冬は終わった。
残念ながら２次の越冬はできなかった。
　第１次観測は、はじめ「予備観測」といわれ、越冬の予定がなかった。西堀さんは越冬の必要性を強く主張し、実現させた。多量に残った燃料や食糧、さらに４棟の建物は、第３次隊に引き継がれた。１次の越冬がなければ、日本の南極観測事業に、数年の遅れが出るのは必至であった。
　まずやってみよう、というに西堀流手法が、功を奏したのであった。

（注）加納一郎さん（１８９８~１９７７）。大阪市生まれ、北海道大学農学部卒、元朝日新聞記者、評論家。著書に「極地を探る人々」「極地の探検・南極」「同・北極」「２５人の極地探検家」「白い大陸」など、また「世界最悪の旅」「千島紀行」など訳書も多数ある。南極観測が始まる頃は数少ない極地の専門家であった。

連載「氷海奮戦」①

「宗谷初陣」

宗谷航海士（1~3 次）　高尾　一三

船乗りは、自分の船が他の物と衝突しないように教育されます。他の船はもちろん、浮遊物、港の施設、岩礁、海底など、船にとって危険なものがたくさんあります。これらに衝突しないように、運航するのです。
ところが南極に行く船は、わざわざ氷にぶつかってでも、目的のところに到達しなくてはならない任務を持っています。普通の船と逆のことをするのですから、初体験のその緊張感は並みのものではなかったのです。

揺れる宗谷

　当時、私は横浜海上保安部巡視船「むろと」に乗船していました。昭和３０年１２月宗谷に乗船を命ぜられました。以来宗谷の改造に付き合い、さらに１次から３次まで、いままでに経験したことのない氷海の航海を経験しました。
　昭和３１年１１月８日、宗谷は乗組員７７名、隊員５３名を乗せ、南極に向け出港しました。約５ヶ月の航海です。
　宗谷は実によく揺れる船でした。一般の船は、動揺を抑えるように船側に「ヒレ」を出しています。

（見送りの人で埠頭が埋まった第１次の宗谷の出港＝共同通信撮影）
これを「ビルジキール」と言いますが、氷海では氷がこれに当たり、船体を損傷する恐れがあるというので、全部取り外して行きました。このため宗谷は大きく揺れました。行きは最大で４５度の揺れ、帰りの暴風圏では左になんと６２度､右に４２度を記録しました。左右１５度以内の動揺なら､静かな航海です。

日の丸機大陸を初飛行

１２月２９日ケープタウン港を出港し、１月７日いよいよ流氷群に到着、これからは誰もが初めて経験する氷との戦いです。まず流氷に沿って西に向かい、途中時々船首を流氷群に突っ込み、船体に与える衝撃を確かめながらクック岬へ。１４日クック岬到着。ここで宗谷搭載のセスナ機を海上に降ろし、南極大陸を偵察しました。この日は日本の航空機が初めて南極大陸上空を飛んだ記念すべき日になりました。

緊張の「突入」命令

宗谷は反転し､１６日東経４０度線に着き、まずヘリコプターで前方を偵察、ここから南へ約１７㌮（１㌮＝１．８㌔）のところに幅６００ｍ、長さ２０００ｍほどの開水面を発見、船橋に松本満次船長の「突入だ」との力強い声が響きわたりました。いよいよ大陸へ向け群氷に突入です。船内は一気に緊張に包まれました。氷量9/１０の群氷、氷の衝撃で船体が破損しないか。われわれは宗谷の改装の結果を信じるしかありません。そして船体は、異常ありませんでした！

さて、どこへ宗谷を運んで行くか。日本隊の命運がかかっています。

突入から１時間後開水面に着き、待望のセスナ機を飛ばすことができました。セスナ機は大陸のプリンスオラフ海岸一帯を偵察、その結果、宗谷の前方に大陸に続く水路と開水面を発見、宗谷は直ちに今度はヘリコプターを飛ばし、そのヘリコプターの支援により、一路南下、途中氷山群を避けながらの前進です。

定着氷に接岸

１９日、船長はヘリコプターに乗り、自ら氷状の偵察に飛びました。氷状はハンモックアイス（氷が積み重なりあった状態)。宗谷は初めてチャージング砕氷をしながらの前進です。２０日早朝氷盤が緩み、前進開始。砕氷しながら南進。ついに大陸に続く定着氷に接岸しました。２９日にはオングル島に昭和基地が誕生しました。

この年の宗谷は幸運でした。流氷群に着いてから定着氷接岸までの１０日間は、気象に恵まれました。この頃の南極海の気象は、東寄りの風が定常風で、東寄りの風は氷海を南に押し付けます。しかしこの年のリュツォホルム湾の天気は、好天が続き、航空機の活動が容易でした。またこの時期としては南寄りの風が多く、幸いでした。南寄りの風は、氷を北に発散させ、宗谷の氷海での行動を、助けました。

大きかった海鷹丸の支援

２月１５日、１１名の越冬隊員と約１５５㌧の資材を残していよいよ離岸です。２月に入れば、リュツォホルム湾はもう秋、気温は下がり、随伴船海鷹丸の報告によれば湾外では東寄りの風が吹き荒れていました。

宗谷は離岸の翌日ビセット（氷に囲まれ動けなくなること）状態となり、西へ西へと氷とともに流され、ついに自力脱出できず、２８日、当時のソ連のオビ号の支援を受け、氷塊から脱出しました。

海鷹丸は、宗谷の氷海突入から脱出までの間、外洋での荒天に耐え、いつ起こるかもしれない宗谷の緊急事態に備え、また貴重な気象情報を宗谷に送り続けました。１次の成功は、海鷹丸の存在なくしては語られません。

宗谷は､ケープタウンを経て､４月２４日、東京に帰りました。一人の事故者もなく、１６８日の航海は無事終わりました。

お知らせ

平成１９年１１月８日にＯＢ会総会
学士会館で午後６時から

２００７年度南極ＯＢ会総会は、１１月８日（木）午後６時から東京・千代田区神田錦町３－２８、「学士会館」で開催される。議事の後、**第４９次隊の壮行会**が行われる。万障お繰り合わせの上ご出席ください

詳細は後ほど各自に送付いたします。

南極倶楽部会長に渡辺興亜氏
6 月例会で 100 回開催を記録

毎月第３木曜日に東京・麹町のレストラン「桃山」で開催している南極倶楽部は、6 月 21 日の例会で１００回目の開催を記録した。約５０人の会員が参集して、１００回目の節目を祝福した。

村山雅美さんの後任の第 2 代南極倶楽部会長には、前極地研究所長の渡辺興亜氏が就任している。

南極ＯＢ会事務局移転

ＯＢ会事務局は、3 月はじめ、東京・千代田区三崎町から次の場所に移転した。

新住所：〒１０１－００６５
東京都千代田区西神田２－３－２
牧ビル３０１

（電話・ＦＡＸ番号、メール等は変更なし）
０３－５２１０－２２５２

メールアドレスやホームページなどは、末尾をご覧下さい。

「南極ＯＢ会」の英文名について

「南極ＯＢ会」の英文表記は
“ＪＡＲＥ　Ｃｌｕｂ”といたしました。

会報ともどもご愛用ください。

（運営委員会）

JARE Club

「南極教室」より

南極教室は、有志を募り 2003 年 5 月から活動を始めました。会員登録者数（講師等協力を申し出た人）は、約 200 名です。この会の発足に当っては、約 80 の新聞社に手紙を送り、南極観測についての広報の新しい取り組みを記事として取り上げていただけるよう依頼しました。この結果、毎日新聞をはじめとして、多くの新聞に取り上げられ、反響がありました。また、観測隊同行記者 OB の方々が積極的に応援してくれたことも、この会の立ち上げに大きな力になりました。

講演は、5 月の「朝日南極教室」を皮切りに始まり、実施された講演は 4 年間で約 130 件になります。講師を依頼して、その後直接講演を頼まれてもこちらに連絡がないこともあり、この活動関連の全講演数を正確には掴めておりません。講演の申し込みは、公民館の講座、学校の授業、小・中学校 PTA などの会合、老人クラブやロータリークラブなど予想されたものが殆ど来ています。地域的には、東北、関東、東海、関西、九州、山陽、山陰、広島近辺などで、北海道、四国からはまだありません。

費用は、実費程度としていますが、あらかじめ決まっている場合など様々なので、謝金として受け取った額の一部を会に寄付して頂くようにしました。交通費などの実費を除いた額の 3 割を基準として、会の活動資金に寄付をお願いしています。

寄付金は、映画用の VHS ビデオテープや資料用の CD-R の購入に当てた他は、ノートパソコン、液晶プロジェクターとスクリーンを購入しました。今後の活動費として預金してあります。予算が少ないのですが、といった申し込みもあり、講師の交通費を負担したこともあります。

「南極教室」は、これまで有志の集まりとして活動してきましたが、南極 OB 会の発足に伴い OB 会活動の一環として位置づけられました。今後は、支部活動との連携を密にしていくとともにマスコミへの働きかけなどが必要と思われます。立ち上げの際新聞などに取り上げられた PR 効果は、すでに 2 年くらいのタイムスケールでなくなっており、申し込みは先細り状態というのが実情です。今後の活動に対する OB 各位のご意見をお願いいたします。なお、講演用の映像資料（パワーポイントファイル）などを提供できるように準備をしています。

文責　國分　征

☞広報委員会からのご案内

１、「南極ＯＢ会会報」は，**ＯＢの皆さんの投稿を歓迎**します。南極への思いや、とっておきの話、ほんとの話、裏話、内緒にしていた話、随想、エッセー、現在の南極とのかかわりの話など、肩の凝らない楽しい話を歓迎します。

「投稿広場」の感じです。写真やイラストも歓迎です。支部からの投稿もまた歓迎します。２０００字まで、４００字詰め原稿用紙使用か、パソコン「添付」で送ってください。ただし、親睦のための会報ですから、お互いの非難、中傷はやめて下さい。掲載しません。編集上の一部手直し、削除等はお許しください。宛先は南極ＯＢ会事務局。巻末のメールアドレスを見てください。

「南極倶楽部」（渡辺興亜会長）は神田啓史編集長により、投稿を主にした立派な「南極」という会報を出されています。重複するのが心苦しいのですが、全国規模の会報であるので、この際投稿欄を設けることにしました。お許しください。

２、創刊号からエッセーシリーズ**「南極ＯＢが綴る体験記」**を始めます。隊と船、第１次からリレー式に、それぞれ代表１人ずつ、隊

の方は各年次の越冬隊の方（２次、６次は別）に書いていただきたい。越冬報告や航海記ではありません。個人の体験や、その隊のビッグイベントのとっておきの話や、南極で得た人生観など、エッセーとして取り上げてください。

字数は大体２０００字程度。写真、イラスト、地図、スケッチ等も提供してください（お返しします）。手書き原稿の場合は４００字詰め原稿用紙を使用、パソコンの場合はメール添付送信してください。添付の場合は１行４６字、１ページ５０行で入力していただくとありがたい。

なお、連載欄「時は巡り」と「氷海奮戦」のトップバッターは、隊の方が第１次越冬隊の村越望さんの「西堀さんと第１次越冬隊」および船の方は「宗谷」航海士高尾一三さんの「宗谷初陣」となりました。お楽しみください。

３、また、今後地方支部欄も充実させていきたいと思います。広報部会からの記事の依頼も行いますが、支部からの投稿も大いに歓迎いたしますのでよろしくお願いいたします。

(懐かしのシーン　南極大陸のハロー)

****
南極 OB 会事務局
所在地　〒１０１－００６１
東京都千代田区西神田２－３－２　　牧ビル３０１
電話&Fax　：　０３－５２１０－２２５２
E-Mail　Address　：　nankyoku-ob@mbp.nifty.com
南極 OB 会ホームページ　：　http://www.jare.org /
****